



Vol.2

HAPPY
Fukushima
Life

ふくしまを舞台へステージに
自分らしく活躍する人々
そして、それを支える地域の人々



4~7 スペシャルトーク 「小松理虔が語る、ふくしま『ゆる移住』のススメ」

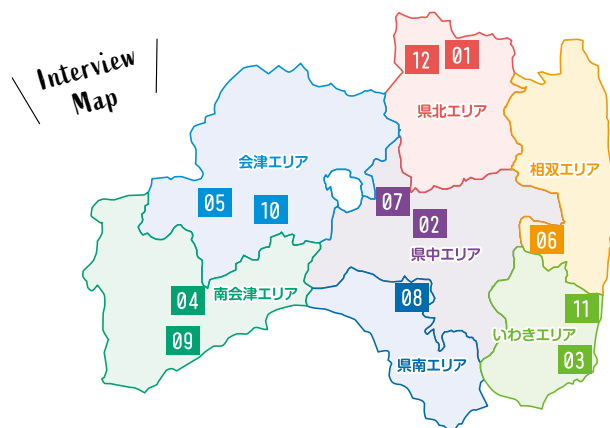
8~37 移住した方にインタビュー

- | | | | |
|----|----|----------------|--------|
| 8 | 01 | 小山 尚文さん | ／桑折町 |
| 10 | 02 | 渡部 裕樹さん | ／郡山市 |
| 12 | 03 | 飯田 真一さん | ／いわき市 |
| 14 | 04 | 岩崎 大さん・純子さん夫妻 | ／南会津町 |
| 16 | 05 | 徐 銓軫さん | ／三島町 |
| 24 | 06 | 福塚 裕美子さん | ／川内村 |
| 26 | 07 | 松尾 一平さん | ／郡山市 |
| 28 | 08 | 塩田 由紀子さん | ／矢吹町 |
| 30 | 09 | 江井 翼さん | ／南会津町 |
| 32 | 10 | 岩波 友紀さん・聡子さん夫妻 | ／会津美里町 |
| 34 | 11 | 榊 裕美さん | ／いわき市 |
| 36 | 12 | 藪内 義久さん | ／福島市 |

38 福島県について 3 地方の特徴やアクセスでみるふくしま

39 移住サポーター 移住コーディネーター／移住・就職相談員／移住推進員

ふくしまでは今、
新しい人の流れが生まれています。
ふくしまにしかない、
さまざまな魅力や可能性を感じて、
多くの人が、この地に移り住んでいます。
ライフスタイルは人それぞれ。
就職・転職、就農、起業、はたまた悠々自適に、
自分らしくいきいきと暮らす方々を
この冊子で紹介しましょう。
そしてぜひ、
実際にふくしまを訪れてみてください。
ふくしまのいちばんの魅力は
この地で暮らす「人」なんです。





小松理虔（こまつ・りけん）
1979年生まれ。法政大学卒業後、福島テレビ報道部記者を経て、現在はローカルアクティビスト（地域活動家）。『ヘキレキ舎』の屋号で、媒体の作成やイベント企画、オルタナティブスペース「UDOK」の運営など。現在、雑誌「TURNS」にて移住者検討者に向けてのエッセー「晴天の霹靂」連載中。『新復興論』（ゲンロン）で第18回大佛次郎論壇賞。共著に「常磐線中心主義」など。

う一つぶっちゃけると、移住は「決していいことばかりではない」ということ。この世界に「元々な町なんて存在しなくて、どこであつても良い悪いは混在しているものです。景色がきれいとか、魚がうまいとか、「良い」ことは最大化して楽しめる。じゃあ「悪い」ことはどうか。悪いこと、つまり「課題」があったら、それをネタにして楽しめるばいんです。むしろ地方では、その「課題」を解決し

ようとするこ
とで、食いぶ
ちが見つかつ
たり、仲間が
見つかったり
します。福島
は課題先進地
区といわれて
いるだけであ
つて、課題だ
らけ。というこ
とは「ネタだらけ」なんです。課題こそが、魅力。今までのキャリアが課題解決に必ず役に立つし、福島に住めば栄光しかないです（笑）
僕の経験上、地域や個人が抱えている課題を社会に出すと盛り上がります。僕が携わっている「igoku（イゴク）」もその一つで、地域の「超高齢化」という課題をポジティブに取り上げたことで、グッドデザイン賞金賞までいただきました。他にも、Facebookで「子育てに悩むパパの飲み会をやるよ」って呼びかけたら、自治体と子育てについて協業することになったり……。自分の抱えている「お困り感」を

今、まさに移住ブームですよ。だからこそ「移住とはなんぞや？」というのをまずは考えていきたいと思ひます。
移住とは要するに「転職と引越しのセット」。「仕事があつて、まあまあ暮らせる」状態になれば、移住成功だと僕は考えます。さらに、今住んでいる町よりも、自然が美しく、より食べ物がうまくて、コミュニティがあつて、子育てしやすい町だったら最高。
移住メディアなんかを見ているとキラキラした事例が本当に多くて、「わたしにはこんな大変なことはできない」って怖気づいちゃいませんか？でも、移住したら必ず起業しなきゃいけないわけでも、就農しないといけない

いわけでもない。メディアには出てこないけれど、移住を成功させた人は「ごまん」という本来の「仕事があつて、まあまあ暮らせる」というゴールであれば、ぶっちゃけ、どこでも「なんとかなる」ものです。「移住促進事業」をやっている地域なら、なおさら。今のあなたのキャリアがいかにせる機会は、どの町にもあると思つてください。そういう意味で、まずは移住のハードルを下げる「ゆる移住」という発想を育てていくことが重要だと思います。



小松理虔が語る、ふくしま「ゆる移住」のススメ

いわき市で活躍する地域活動家の小松理虔さん。震災以降、福島県外に住む人に向けた情報発信やツアーガイドなど、福島の内／外の架け橋的存在であり続けています。今、まさに移住を検討中の方に向けて、自身の体験や先輩移住者のリアルを織り交ぜながら、目から鱗のぶっちゃけ話を語ってくれました。

キーワードは、「ゆる移住」。仕事や住まいなど、環境変化を余儀なくされる移住ですが、この「一大決心が必要」なイメージこそが移住のハードルを高くしてしまっている。小松さんは話します。

（この記事は、2019年11月に東京で開催された「福島くらし&しごとフェア」での講演録を編集したものです。）



いわきの動きを伝えるフリーペーパー「igoku」。
「いこく」はいわきの方で「動く」という意味。

通じてコミュニティが生まれたり、仕事や副業につながっている人が本場に多いです。ただ、間違えないでほしいのは、課題解決に名乗りをあげなくたって、全然いい。そこは自分で選べばいいんです。

「移

住における福島県の優位性とは何か？」と聞かれたら、僕なら「①移住者コミュニティがしっかりあること」「②顔が見えて、すぐにつながることに」「③仕事がつぶらあること」と答えます。

をはじめ、相談できたり、愚痴ったりできる場所があると心強いです。なにより、移住しすぐに「理想の仕事」「自分らしい移住生活！」と思い過ぎずに、1〜2年はならし運転だと捉えることです。ステップアップはいつでも可能ですから。

とにかく焦らず、たくさん出かけて仲間を増やす。その人たちと共に過ごし、困っていることを分かち合う。そうやって人と出会っていくなかで、理想の仕事が見つかることのほ



ただし、注意が必要なのは、求人広告とかハローワークに載っていない仕事こそがたんまりあるということ。履歴書を握りしめて「御社で働かせてください！」という、従来の就活スタイルはあまりオススメしません。知り合いがSNSでつないでもらったりするほうがトントン拍子にことが運ぶ。お目当ての企業のイベントに手伝いに行つて、それとなく「この会社で働きたいなあ」とつぶやいたら、その場で即採用！みたいなことがよくあるんです。

だから、あれこれ考えて不安になるよりも、移住しちゃったほうが早い。移住した人の後ろに「道」ができる。あなたには、あなただけの移住の物語が必ず生まれます。

どうしても移住を決断できないのであれば、まずは週末だけとか、1か月だけの移住から始めればいい。この時代、ブームとはいえ「移住したい」と思っている時点でマイノリティです。だからこそ、移住者と地域の人が連帯して、楽しんじや



トークイベントの様子

うことが大切。「今ここから、始める」という気持ちで飛び込んでください。絶対になんとかになりますから。

僕

自身、いわきにUターンした人間なので、移住前に抱く理想と懸念のせめぎあいはいくつわかります。僕が地元の小名浜に戻ることを決めたときだって「地元で働く場所はないだろうし、稼ぎも多くないだろうな」「東京の方がチャンスが多いよな」と思いました。僕はローカルメディアを作ったり、コミュニティスペースの運営をしたかったんですけど、案の定、地元には自分のやりたい仕事はなかった。求人票を見ては気が滅入ってしまった……海辺のかもめだけが友達でした。結果的に就職するまで3か月かかりました。とはいえ、仕事が決まるまでのモラトリアムは必要だったと思います。

この経験から僕が学んだことは、移住初期は心の問題が大きいということ。実家

うが多いということを覚えておいてほしいです。「ないなら自分で作っちゃえ！」とチャレンジ



する場合も、地方のほうがなにかとハー

ドルが低いと思います。

後になります。僕は「楽しくない移住なんてない」と思っています。すべての移住は楽しい。でも、それには、仲間が必要です。そして福島県は、そんな仲間が見つかる場所だと思います。どんな外から人が来てほしいと、みんなが願っている。だから心配は無用です。

東日本大震災と原発事故は福島に大きな課題を生み出したけれど、それをポジティブに解決しようとする人たちが集まって、県内各地に散らばっています。先輩移住者たちが、地域の魅力を膨らませようと、課題を解決しようと日々奔走しています。そして、彼らがこ

取材を終えて

お話が終わると、小松さんの周りに多くの参加者が駆け寄りました。igokuのフリーペーパーを眺める人、「今度いわきに遊びに行ってもいいですか？」と尋ねる人。思いがけず心を揺さぶられ、背中を押されたような表情の面々。いつか福島に移住して、思い悩むことがあっても、「大丈夫だよ！」と小松さんが励ましてくれる……そんなイメージが目に見え、浮かぶトークイベントでした。



愛される桃農家へ、ゼロからの挑戦！

Message!

何より、農家の方々が天候や自然に
立ち向かう姿が格好よかったんです。



福島県伊達郡桑折町在住 小山 尚文（こやま なおふみ）さん

1981年、東京生まれの東京育ち。前職は行政書士。
福島県内の親戚の農作業を手伝ったことがきっかけで果樹栽培に興味を持ち、東京・港区から桃の一大産地である桑折町へ2017年に移住。
翌年、桃農家としてのスタートを切り、現在は初収穫に向け日々作業に励んでいる。



「それまでは農業という、年配の方がのんびりやっているイメージでした。でも実際は、土壌の知識や価格、販売方法など、生産するだけではなくさまざまな知識が必要になることを知りました。何より、農家の方々が天候や自然に立ち向かう姿が格好良かったです。天候に恵

「小山果樹園」を目指して

桃の一大産地で知られる福島県北部。その中でも25年連続（2018年現在）で「献上桃」の産地に選定されている桑折町で、小山尚文さんは2018年4月から桃農家としての一歩を踏み出しています。

都心で行政書士として働いていた小山さんが桃の栽培に興味を惹かれたのは、桑折町に隣接する伊達市で、果樹農家を営む親戚の農作業を手伝ったことがきっかけでした。週末だけのつもりで足を運ぶうちに、農業の奥深さに魅せられたといいます。

まれて良いものができるのは当たり前、でもそうでないときにも良いものが作れるのがプロ。それを自分でもやってみたいと思ったんです。

ついには、新品種の育成や栽培技術の研究を行う県の機関（福島県農業総合センター果樹研究所）に通い、本格的に果樹栽培を学び始めることを決意。「桃栗三年、柿八年」のことわざどおり、果樹は植えてから収穫できるようになるまでに時間がかかることから、並行して農園の土地探しも始めました。

見つけたのは、桑折町の街並みが見渡せる小高い山の中腹にある空き地。1本1本心を込めて植えた約130本の苗木は、「小山果樹園」の第一弾の桃となるべく、数年後の収穫のときを待っています。

同世代の仲間たちに支えられて

果樹栽培が盛んな桑折町でも、いわゆる農家の後継者ではない移住者が、ゼロから就農するケースは極めて異例。

それだけ果樹農家はハードルが高いともいえますが、小山さんの難しいチャレンジを後押ししたのは、農作業や体験ツアーなどを通して出会った同世代の果樹農家の担い手たちでした。

「みんな初めから家業を継いだわけではなく、何年か都会で働いたりして地元に戻って来た人が多いんです。移住して良かったことのひとつは、そんな仲間たちに会えたこと。お互いライバルではありますが、気軽に情報交換したり、切磋琢磨していきけるいい関係です。町のことも、彼らから教えてもら

ることが多いんですよ。ちなみに、都内で行政書士をしながら離れて暮らす奥様は、小山さんの決断に反対するとはなかったそう。「自分が思い



同世代の仲間たちと

将来の夢

立ったらすぐ行動に移してしまう性格なのを、妻は分かってくれているのではないだろうか」と小山さんは笑います。

移住によって生活が目まぐるしく変化化する中で苦労したのは、周囲の人からの信用を得ることでした。土地柄、つながりを大事にする方が多いためか、畑を採すのも「苦労だった」と言います。しかしその反面、こういうところかも知らずに飛び込んだ桑折町での日々は、毎日新鮮なことばかり。

「夜は真っ暗だし、熊は出るしー移住して初めての冬は雪がすごくて大変でした。でも生活に関して不便さはあまり感じません」。

小山さんに将来の夢について尋ねると、「桃の栽培が軌道にのるまで10年かかるので、先のことはまだ…」と苦笑しながらも、「いい桃を作ってみんなに食べてもらうこと」という答えが。いずれは都内の友人を招いて、畑や里山の風景の中で採れたての桃を味わってもらいたいと考えています。

「移住者」と言われなくなったときが、本当の意味で移住できたことになるのではないかと思います。早く町に溶け込んで、「桑折町の住人」になりたいです。





移住への決断と「人とつながる喜び」

Message!

福島は訪れるたびに不思議と
知り合いが増えていって。
そういう場所は他にはありませんでした。



福島県郡山市在住 渡部 裕樹（わたなべ ゆうき）さん

1986年、兵庫県生まれ。
大学院卒業後、愛知県で航空機の製造工場に勤めていたが、縁ができた福島
県での暮らしを考えていたところ、老舗酒造に採用され、2016年に郡山市
へ移住。
前職で培ったものづくりのノウハウを生かしながら、酒造りに携わっている。



出身地である兵
庫県西宮市が酒
造りのメッカで
あったことや、
日本酒の本を読
んだ渡部さんが
その歴史や造り

郡山市東部の山間部にある、創業300年を超
える老舗の酒蔵「仁井田本家」に勤務している渡
部裕樹さん。大学院を卒業後、愛知県で航空機
の製造工場に勤めていました。最先端のものづく
りの現場から、酒造りという伝統産業への異色の転
身。この決断の背景にあったのは、「福島で働か
たい」という強い思いでした。
「もともと旅行が好きで、あちこち出かけていたの
ですが、福島は訪れるたびに不思議と知り合いが
増えていって。そういう場所は他にはありません
でした。それと同時に、工業地帯で働いていた反
動か、四季の移り変わりを感ぜられる仕事をし
たい」という強い思いでした。

熱意が通じて老舗酒蔵へ



仁井田本家 18代目蔵元・仁井田穂彦さんと

方に興味を持ったことも、酒蔵を意識する契機と
なりました。
知人の紹介で「仁井田本家」を知った渡部さんは、
蔵を訪れ、蔵元と女将に直談判。熱意を買われ、
採用と同時に郡山市に移住しました。
現在は食品課に所属し、甘酒や「こうじチョコ」
といった酒蔵ならではの商品の開発に携わりなが
ら、前職の経験を生かし、生産工程の標準化やマ
ニユアル作りなども任されているそうです。

福島での暮らし

「学ぶことが好きなので、今後は醸造についての
知識も深めていきたいです。でも実はお酒にめつ
ぼう弱いんですけれどね」と笑います。

休みの日は近くで開催されるイベントに行つてみ
たり、趣味のサイクリングをしたりと、福島での
暮らしを満喫している渡部さん。そのフットワー
クの軽さに、移住を成功させるヒントも隠されて
いるようです。

「福島県内には個人やお店が企画するマルシェや
イベントが多いので、面白そうと思ったものには
積極的に参加しています。知り合いがいなくても、
そういうところに行ったら自然と話も弾みます
し、新しいつながりもできたりして。福島は広い
ので行きたいところが次々出てきますね」。

移住する前にも、できるだ
け現地の知り
合いを作って
おこうと足繁
く福島に通つ
たといいます。
その際に、縁
もゆかりもな
い土地に関す
る情報収集の
入り口として、
SNS が役に



磐梯山の山開きにて

人と人がつながるということ

人に関わるのが好きな渡部さんにとって、小
さなコミュニティが有機的につながっている地方
ならではの生活は、居心地が良いものとなりま
した。その感覚を味わってもらうべく、もっと
郡山市に人を呼び込みたいというのが渡部さん
の目標です。

現在は、郡山市の観光をテーマにしたプロジェク
トにも参加。企業で働く若手職員たちが集まり、
郡山の観光資源になるようなものを話し合う場
では、渡部さんの「外からの目線」は欠かせないも
のとなっています。
移住について、最後に渡部さんはこんなふうに話
してくれました。

「移住してきた人は、やはりずっとよそ者なの
かなと思います。でも、自分がその土地で結婚して
子供ができたりしたら、その子はそこで生まれ
育っていくわけで。次の世代の人たちが、この場
所に生まれてよかったと思えるようになってくれ
たら、この決断も間違っただけだったと思えるの
かもしれません」。



いわき

いわき市

移住は人生をプラスに変える

Message!

自分の移住を振り返っても、
これまでをリセットして、
新たに見つめ直すことができた気がします。



福島県いわき市在住 飯田 真一（いいた しんいち）さん
1977年、東京都生まれ。
いわき市出身の奥様との結婚をきっかけに、同市へ2015年に移住。
それまではサラリーマンとして都内や福岡県で勤務。
退職後は、フリーランスの経営コンサルタントとして地域に関わっている。

自分にとってちょうどいい、
いわき市へ

太平洋に面する福島県浜通り。その南部に位置し、
県内最大の面積を持ついわき市で暮らしている飯
田さん。東京出身ですが、以前は福岡県で暮らし
ており、実は今回が2度目の移住となります。
いわき市に移住することになったきっかけは、同
市出身の奥様との結婚。東日本大震災後、避難者
や被災者の支援に携わる中で出会い、結婚と同時
に移住を決めたそうです。

「今まで出張などでさまざまな土地を訪れました
が、その中でもいわき市は気候的に一番住み心地
がいいです」

ね。夏はそれ

ほどクラー

を使わない

し、冬はほと

んど積雪がな

い。街のキャ

パシテイも

「ありすぎず、

なさすぎず」

でちょうどい

いです」。

加えて、特急

を使えば東京



遠洋漁業の基地として栄えた江名港

まで片道約2時間というアクセスの良さも魅力だ
そう。都内で働きながら、週末をいわき市で過
すといった二地域居住にもびったりと太鼓判を押
します。
「完全に定住するのはハードルが高くて、二拠
点での居住や活動なら試してみたいと思う人はい
るはず。僕が関わっている『江名（えな）の町再
生プロジェクト』でも、将来的には二地域居住を
進めていくつもりです」。

転職しない移住のカタチ

飯田さんの職業は、移住前から変わらず経営コン
サルタント。これまで温泉旅館の経営再建から飲
食店のプロデュースまで、さまざまなプロジェク
トに関わってきました。転職せずに移住した飯田
さんに、地方で生業を成立させるための秘訣を聞
きました。

「移住してしばらくは、生活の糧を得ることより
も地域に馴染むことを優先してほしいと思いま
す。生活を構築することに集中すると、地域との
距離が生まれ、結局また元の土地へ戻ってしまう
などの例を見てきたからです。今は持ち直しまし
たが、移住当初は年収が4分の1に。あえて言う
なら、半年間収入がなくても食べていけるくらい
の蓄えはあったほうがいいかもしれません」。
加えて、「ギャップに慣れる」ことも必要とのこと。
例えば、最寄りのコンビニが数キロ先だったり、
トイレが水洗ではなかったり。移住先に慣れを抱
いてやってきても「想像していた暮らしと違う」
と感じることは多いはず。しかし、これまでの生
活と異なる部分に固執せず、せっかく移住したん
だからとプラスに捉えてほしいと話します。

地域との関わりと自らの役割

2017年からは、かつて遠洋漁業の基地として
栄えた江名港に活気を取り戻そうという「江名の
町再生プロジェクト」にもアドバイザーとして関



民泊として活用予定の古民家

わるように。
住民の方々の
思いや夢を現
すべく、イベ
ントの運営に
携わるなど奮
闘の毎日だそ
う。地域に多
くある古民家
を、民泊とし
て活用する事
業も構想中だ
です。

来てこんな風に地域の人と関わるようになり、
やっぱり自分はイベントをしたり、人と一緒に何
かを作り上げたりすることが好きなんだと再認
識しました。今は、そんな自分のライフワークが、
少しでも地域の役に立てばという思いです」。
根っからの面倒見の良さで、人をまとめあげてい
く飯田さん。その存在は地域にとってなくてはな
らないものとなっています。

そんな飯田さんにとって「移住」とは？

「人生をプラスに変えるターニングポイントで
しょうか。自分の移住を振り返っても、これまで
をリセットして、新たに見つめ直すことができた
気がします。今後移住を考えている方にも『ここ
にきて良かったな』と思えるような移住をしてほ
しいですね」。



夏は働き、冬は遊ぶ、理想の暮らし

Message!

ここで暮らしているからか、
子どもたちには生きる力が
身についているような気がしますね。



福島県南会津郡南会津町在住 岩崎 大さん・純子さん夫妻

岩崎大さんは1979年、静岡県生まれ。幼少期を埼玉県で過ごす。一方、妻の純子さんは1977年、東京生まれの東京育ち。二人は共通の趣味を通じて南会津町で出会い、東京で結婚するも、2010年に南会津町に移住。現在は二人のお子さんに恵まれ、同町で南郷トマト生産者としての道を歩んでいる。



町内にそびえる坪入山からの景色

津町にある「たかつえスキー場」でした。そんなやさつもあつてか、移住先として南会津町という選択肢が自然に出てきたそう。「雪が降ることも知っていたし、むしろ

田舎暮らしと理想的な暮らし

会津地方の南部、栃木県との境頭に位置する南会津町で、南郷トマト農家として忙しい日々を送っている岩崎さん夫妻。森林が9割を占め、冬は豪雪地帯となるこの町に、2010年に移住してきました。

もともとは東京で暮らしていた一人が移住を決めたのは、「田舎に行ってみる?」という純子さんの何気ない一言から。毎日仕事の愚痴をこぼす大さんの姿を見かねての言葉でした。

「彼女の口から田舎に行こうなんて言葉が出ると思っていなかったのが驚きでしたが、それが背中を押してくれました。幸いにもすぐに家が見つかり、1か月後には引っ越していました」と大さん。スキーが大好きな二人の出会いは、実は南会

雪かきは大好きです!地域の皆さんからは『なんでこんなところに来たの?』と聞かれますが、何も苦労していないんです。夏はトマトの収穫があつて大変ですが、冬は遊べますから」と笑う純子さん。

移住後は二人のお子さんにも恵まれ、休みの日には趣味のスキーのほか、登山や川遊び、BBQなどを家族で楽しんでいるそうです。

「南郷トマト」との出会いと選択

移住前は大さんがスキー関係、純子さんは歯科助手と、農業とは縁のない仕事をしていた二人。大

さんが、就農までの経緯を教えてくださいました。「知人の紹介を受けトマト農家でアルバイトするようになったときに、南郷トマトは町のサポートも手厚く、農業を始めやすいということを知り、本格的に就農に向けて動き出したんです」。

4年間ほどみっちり先輩農家の元で修行を積み、その後独立。JAや南会津町、先輩農家の方々までもが親身になって農地の候補を探してくれたほか、地主さんへの挨拶も一緒に行ってくれたなど、充実したバックアップ体制で就農を後押ししてくれました。

「未経験での就農でも、成功に導いてくれるノウハウが整っていたことが心強かった」と話す大さん。今では楽しみながら仕事に向き合っているそうです。

「農業は、天候や作物の様子を見ながら臨機応変にやっていくのが楽しいですね。確かに夏が近づくにつれ、トマトの生育が心配で寝られなくなったりピリピリしたりすることもあります。でも、それさえいざ2か月ほど。あとは時間にも余裕ができるので、日々仕事に追われるようなストレスはありません」。

純子さんの力も借り、夫婦二人三脚でトマト栽培に精を出しています。

仕事、子育て、趣味の並立を叶えた移住生活

岩崎さん夫妻が移住して良かったと思うことのひとつが、子育てだといいます。移住後に誕生し、大自然の中ですくすく育った子どもたちは畑が大好



家族で登山した際の一枚

(2018年取材)



外国人協力隊が伝える「奥会津暮らしのススメ」

Message!

一度きりの人生、せっかくだから
いろいろなところで生活を体験して
みるのもいいと思いますよ。



福島県大沼郡三島町在住 徐 銓秩（じょ せんい）さん

1984年、中国・上海市で生まれ育つ。同市の高等学校を卒業後、京都へ留学。上海市にあった福島県上海事務所勤務したのち、福島県の国際交流員として活躍。

2018年4月からは奥会津復興センター所属の地域おこし協力隊として、奥会津地域の魅力の発信などに日々精力的に取り組んでいる。

の、本当の福島の姿を伝えたい。そのためにはやはり福島に來なければと考えました。

念願の福島勤務が叶い、国際交流員として5年の満期まで勤めあげた徐さん。その後も福島に残ることを決め、ちょうど同時期に募集されていた「奥会津地域おこし協力隊」に応募し採用され、現在に至ります。

「生涯、福島と関わり続けたい」。そんな強い思いが、徐さんの活動を後押ししています。

初めての田舎町での暮らし

学生時代を含め、日本で生活した期間は10年を超える徐さんですが、奥会津のような田舎町は初め

て。いろいろと不便なことも多いのではと思いきや、特に苦労はないといいます。

いわき市で知り合った同じ上海市出身の奥様は、取材時に第二子を妊娠中。最寄りの病院に小児科や産婦人科がなく、約30キロ離れた会津若松市まで出なければなりませんが、それでも車があるので問題はないとのこと。

しかし、そんな徐さんを悩ませるのがカメムシ。会津地方の山間部で秋から冬にかけて大発生するのですが、徐さんはこの虫が大の苦手だそう。「先週末も130匹はやつつきました」とすっかり辟易した様子。

ただ、他にも雪道で事故に遭ったり、旧道を散策していて山で遭難したりと、こちらが驚くような出来事に遭遇していても徐さんは前向きで、「私にとっては福島での経験はすべてが印象深く面白いことばかり」と、笑い話のネタのひとつにしてしまうほどです。

「2、3年前までは日本での暮らしに慣れすぎて感動することも少なくなっていました。奥会津への移住をきっかけに、いろいろと勉強し直しているところです。毎日が新鮮ですね」。

外国人との懸け橋に

バイタリティあふれる徐さんの今後の目標は、「会津のことを一番よく知る外国人になること」だといいます。徐さんは鉄道だけでなく、街道や歴史、伝統文化などにも興味があるため、それらを外国人旅行者にも発信していきたいと意

「福島」と関わっていく決意

徐さんは2018年4月から「奥会津地域おこし協力隊」として三島町に赴任し、日本語と中国語を使った情報発信などに意欲的に取り組んでいます。学生時代を関西地方で過ごした徐さんにとって、とりわけ福島との縁が強く結ばれた背景にはこんな出来事がありました。

「最初に就職したのが上海市にある福島県上海事務所。そこでの初めての福島出張が2011年の3月10日でした。翌日、仕事を終えて、趣味の鉄道旅をしようと関西に向かう途中で地震が起こったのです」。

間一髪、被災を免れた徐さんですが、その心にはずっと「福島から逃げた」という思いが残り続けます。その後、2013年に、日本大使館が募集する国際交流員に応募。赴任希望地には迷わず「福島」と書きました。

「震災後も福島を訪れ、仮設住宅で被災した方々から話を聞いたりして、力になりたいと思っていました。自分が実際に目見ても

気込んでいます。

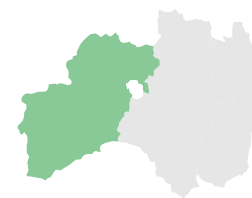
「奥会津にはこれからどんな焦点が当たってくると思います。そんなときに自分が第一人者として力を発揮できたいですね」と話し、いずれは福島県への移住や定住を選択する外国人を増やしたいとの思いも。それだけの魅力が福島にはあると強調します。

「福島に暮らしていると自然に溶け込んでいく感覚があって、落ち着きます。移住は生活を一変させる手段ですが、日本での移住は中国よりもとても気楽にできます。一度きりの人生、せっかくだからいろいろなところで生活を体験してみるのもいいと思いますよ」。

（2018年取材）



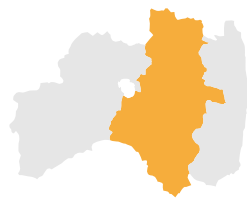
復興庁の事業で台湾人ジャーナリストのアテンドも



大自然と伝統に抱かれる

【会津】

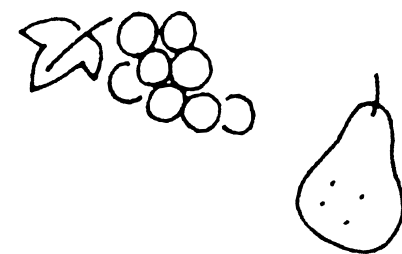
Aizu



四季が美しく移ろう

【中通り】

Naka-dori

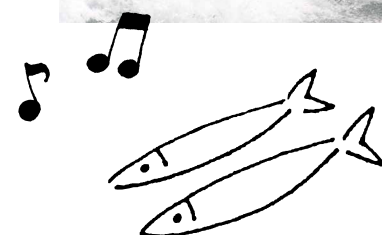




潮騒がきこえる

「浜通り」

Hama-dori





花を通じて、川内村の未来を見届けたい

Message!

川内村に戻ってきたときには、
次にほかの場所に行きたいという気持ちが
湧かなかったんです。



福島県双葉郡川内村在住 福塚 裕美子（ふくつか ゆみこ）さん
大阪府出身。21歳の頃、生花の魅力に目覚め花屋の世界に。
東日本大震災直後、川内村出身だった当時の同僚と村を訪れ、2012年に移住。
花屋の修行のため海外へ渡るも、帰国後再び川内村へ。
現在は「Fuku Farming Flowers」を開業し、花の出張販売をしながら、
川内村での自店舗オープンに向け準備を進めている。

ドイツから村へ戻って始めた 花屋での苦勞

かったので、村に移住して何かするしかないと思いましたが」と当時を振り返ります。
まだ戻る住民も少なかった当時の川内村で、役場の臨時職員の職を得た福塚さんは、村の人が集まるイベントがあると聞きつけては参加し、人とのつながりをつくっていきました。
「移住したら、とにかく顔売ってコミュニティをつくっていくことが大事。その中で自分のやりたいことを繰り返し伝えていけば、いざ行動を起こした時に協力者が現れるんです」。
実際に福塚さんは、未経験だったにもかかわらず農業の仕事を得て、農業体験のボランティアイベントや町のお祭りの出店などを手掛けるようになりました。

川内村で約3年間暮らした福塚さんですが、海外で花屋の修行をしたという、以前から胸に秘めていた思いを叶えるべく、一旦村を離れ、1年間ドイツへ渡ります。
村の仲間に渡航の報告に行った時、自然と「ドイツから戻ったら、川内でお花屋さん開くから」という言葉が出たといいます。「だから今川内にいるのは、その約束を果たすためなんです」と笑う福塚さんですが、初めは順調ではなかったそうです。

「川内村での家が見つからず、1年くらい元保育園だった施設に暮らしていました。開業した時も、応援してくれる人と拒絶する人と半々で、辛い思いもしましたが、『応援してくれる人が50人いたら敵も50人いるのが村社会だ』と聞いてから、応援してくれる50人を大切にすればいいんだと吹っ切れました」。

その後、福島県内の様々なメディアで取り上げられるようになり、認めてくれる人も増えていきました。「やり続けて結果を出していくことしかないんです」と福塚さんは前だけを見えています。

村の未来を、みんなと笑いながら つくっていく

村での自店舗オープンを目指す福塚さん。「川内村は実は人材の宝庫で、食やアート、美容関係のスキルを持った女性がたくさんいるんです。そう

震災直後に村で見た景色 移住してできたつながり

「ふくちゃん」の愛称で呼ばれている福塚裕美子さんは、双葉郡唯一の花屋として「Fuku Farming Flowers」を運営しています。今はまだ店舗を持たずに、週に2〜3回、商業施設の店先で出張販売を行う日々。「双葉郡内で必要な商業施設は揃ってきたので、次はお花かなと思いました」と話します。

「あらお花、いいわね、と言ってもらえるだけでもうれしいんです。特別な日じゃなくても、家にお花がある日常を届けたいと思っています」。

福塚さんは、東京の花屋で勤務していた2011年に東日本大震災に遭遇。川内村出身の当時の同僚に連れられて震災直後の川内村を訪れます。



このとき初めて福島県に足を運んだ福塚さんでしたが、村の荒れた田んぼの景色を悲しむ同僚の姿を見て、美しい田園風景を取り戻したいと思い、勤めていた花屋を辞め、2012年5月、川内村へ移住しました。「東京に戻っても川内村で見た景色が忘れられず、何もできない自分が苦し



いう人たちが村の外に出なくても、自分のやりたいことを仕事にできる場をつくれたらいいなと思っています」。

今後については、こんなふうにも語ってくれました。

「今までは移住するときに次の行き先が見えていたけれど、川内村に戻ってきたときには、次にほかの場所に行きたいという気持ちが湧かなかったんです。だから私はずっと、この村で生きていくんだと思っています。みんなが笑って暮らしながら、村の未来を見届けたいです」。

福塚さんの真つすぐな視線と笑顔には、村への愛情があふれていました。



どこで暮らすかではなく、誰と暮らすか

Message!

住んでみたらいい場所って
すごく多いと思うし、怖がらずに
楽しんでもらえればと思っています。



valo

福島県郡山市在住 松尾 一平（まつお いっぺい）さん

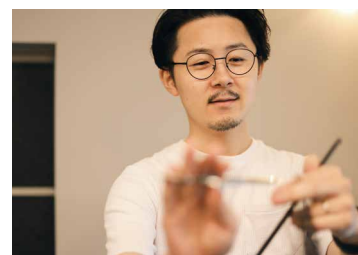
1984年、青森県生まれ。
東京の美容専門学校を卒業後、都内の美容室にて勤務していたが、郡山市で
美容師をしていた奥様と結婚するため同市に移住。
現在は空き家を改装した美容室「valo」を開業し、多くのお客様をお迎えし
ている。24歳の頃、1年間のイギリス留学経験を持つ。

不安も迷いもなかった、
郡山への移住

郡山市在住の奥様との結婚を機に、勤めていた美容室を辞め、東京から一ターンの松尾さん。約10年間住んでいた東京を離れることに未練はなく、不安も迷いもなかったといいます。

「僕にとっては、どこで暮らすかではなく、誰と暮らすかが重要でした。考えなければならなかったのは唯一、どうやって仕事をして食べていくのかということだけ。どんなに東京や青森から遠い場所だったとしても、妻のもとへ移り住むことに迷いはなかったです」。

郡山への移住を決めてから、準備期間は約半年。「移住というより、単なる引っ越しという感覚でした。今回インタビューを受けることになって、『そうか、自分は移住したんだ!』って初めて気が付いたくらい」。



移住と同時に郡山の美容室で働きはじめ、スムーズに新生活はスタート。東京での勤務経験は、技術面だけでなく、お客様とのやりとりにおいても武器になりました。

「お客様からこの町のことを教えて

いただいたり、郡山を知らないからこそ生まれるコミュニケーションがありました」。

家族とともに、自店舗をオープン

2017年12月、当時出産間近だった奥様と二人三脚で郡山市内に美容室「valo（ヴァロ）」をオープン。自分たちで店舗用の土地を探し、内装には夫婦で選定した建具など取り入れながら、理想の美容室を創り上げました。

家庭を築き、自らのお店を持ち、大切なものが一つずつ増えていく中で、松尾さんにとって郡山が



「valo」の店内から望める庭園

知らない町に触れていく楽しさ

「valo」には、松尾さんご夫婦の店づくりの信念が込められています。

「僕たちが大事にしているのは、とにかくお客様を綺麗にすること。そして通ってくださっているお客様が常におしゃれと感じ、誰かに紹介したくなるようなお店であること」。

その上で、さらにお客様に満足していただくために、valo LIBRARYと題して貸出図書を用意したり、奥様が制作したドライフラワーのアクセサリなどを店頭に並べたりと、新しい試みにもチャレンジしています。こうした取組は、地域のお客様たちからも喜ばれ、松尾さんはより一層やりがいを感じているそうです。



ドライフラワーを使ったヘアアクセサリ

最後に、これから移住を考えている方に向けてアドバイスを伺いました。

「郡山でも、それ以外の町でも、その土地ごとにいろんな人がいて、たくさんの方の暮らしがあります。移住には、その暮らしに触れて、知らなかった町を知っていく楽しさがあるんですね。住んでみたらいい場所ですごく多いと思うし、怖がらずに楽しんでもらえればと思っています。僕自身、海外に住みたいと思ってイギリスに住んだら、いい意味でなんてことなかった。どこに住んでも一緒。でもその中で土地ごとの違いがあって、その違いを楽しめたらいいんじゃないかな。移住って、僕はすごく簡単だと思います」。松尾さんは、そう力強く話してくれました。



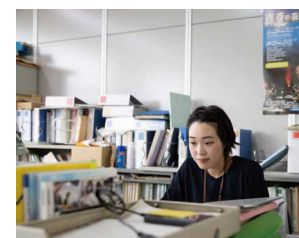
理想の田舎暮らしができる町が、「ふるさと」に

Message!

見つけた！という感じでした。
この町だったら自分がやりたいことが
できそうな気がして。



福島県西白河郡矢吹町在住 塩田 由紀子（しおた ゆきこ）さん
埼玉県出身。関東地方の農業大学で「昆虫の機能を活用したものづくり」を
研究していた際に、ゼミ活動の一環で矢吹町を訪問。すぐに町を気に入り、
大学院への推薦を辞退して矢吹町職員に。
現在は産業振興課に所属し、町のPRイベントや移住関連業務を担当してい
る。夫の実家に暮らすワーキングママ。



役場での仕事風景

全国各地の田舎
町を訪れていた
塩田さんです
が、住みたいと
思った場所は矢
吹町だけだった
そう。「見つけ
た！という感じ
でした。矢吹い
いよって、一

「なんで都心に生まれたの？というくらい、今の
暮らしが合ってるんです！」
そう笑顔で話すのは、埼玉県の大宮で生まれ育っ
た塩田由紀子さん。矢吹町役場に勤務して6年目。
現在は夫の実家に暮らし、子育てをしながら仕事
を続けています。
「どうして大都会の大宮から、こんな田舎の矢吹
に移住したの？」とよく聞かれるそうですが、「こ
んなにいい町ほかにないですよ！」と返すそう。
屈託のない笑顔と板についた福島弁から、この町
への愛情がふれています。
塩田さんが初めて矢吹町を訪れたのは、大学4年
生の時。通っていた農業大学の研究室の先生と、
矢吹町長が同級生だったことが縁で、震災後の町
を元気にする農業イベントに参加したことがきっ
かけでした。
もともと田舎暮らしへの憧れがあり、それまでも

一緒に参加した友人とずっと話していて、そのこと
を町の人にも伝えたいです。この町だったら自分
がやりたいことができそうな気がして」。
この時、塩田さんが町に滞在したのは、1泊2日。
そのたった2日間で、矢吹のどこまでも広がる田
園風景や、震災での苦労を微塵も見せない農家の
方々の姿などに惹かれ、大学院への推薦を蹴り、
締め切り直前だった矢吹町役場職員の採用試験に
応募。見事合格し、新卒で、埼玉県から矢吹町に
移住することになりました。

車の免許なしで移住 それでも暮らせてしまう町だった

なんと塩田さん、移住した当初は車の免許を持っ
ていなかったそう。「職場とスーパーと駅まで、
徒歩圏内で行ける場所に家を探しました。矢吹に
はそういう物件が結構あって、車がなくても私生
活は問題なく暮らせていたんですよ」。
矢吹に来てから教習所に通い、無事運転免許を取
得。行動範囲が広がり、今やすっかり車社会の住
人になりました。

塩田さんは現在町役場で、地元のイベント企画や
町のPR、移住者促進などの業務にあたっています。
移住イベントでは、自身の経験を生かした
アドバイスを交え、矢吹町の魅力を存分に伝えて
います。



田んぼの見えるところに 暮らし続けたい

塩田さんが田舎暮らしをしたかった理由のひとつ、それは、都心の満員電車が辛かったこと。埼
玉から神奈川県にある大学まで、長時間満員電車
に揺られる日々の中で、「このままでは自分がお
かしくなってしまう」とまで思ったそう。

「都心で子どもを連れて電車に乗ると、大変なこ
とのほうが多いと聞いて。でも田舎でなら、電車
に乗らないという選択ができる。子育てをするな
ら絶対田舎がいいと思っています」。

その他にも、矢吹町には駅前に子どもを遊ばせら
れる施設や図書館があるなど、子育てにとっても良
い環境だと感じているそうです。

結婚・出産を機に町内のアパートから夫の実家に
暮らすようになってからは、毎日近所の人が声を
かけてくれるように。「周りの人が子どもを可愛
がってくれて、地域で見守られながら育ってるな
と感じます」。

そんな塩田さんの夢は、田んぼの真ん中に家を建
てること。矢吹町で一番好きな場所は、見渡す限
りの田んぼが広がる「神田（かんた）」地区だと
いいます。「主人は、田んぼの真ん中は虫が多い
から嫌みたいで、じゃあせめて田んぼが見える場
所について言ってます」。

矢吹町がもうすでに、塩田さんにとっての「ふる
さと」になっていました。



南会津の地で受け継ぐ、正直な豆腐づくり

Message!

どの国でも田舎に行けば行くほど、
その地域らしさが垣間見られることが
非常に面白かったんです。



福島県南会津郡南会津町在住 江井 翼（えねい つばさ）さん
1983年、福島県いわき市生まれ。
都内の企業でシステムエンジニアとして勤務したのち、1年間の世界一周旅行を経て、2015年から南会津町で地域おこし協力隊として3年間活動。
その後、同地で豆腐店を継業・起業。無添加・釜炊きによる、こだわりの豆腐づくりを実践している。



前沢曲家集落

その後仕事を辞め、農業生産法人で約3年間学んだ江井さんは、地域おこし協力隊に応募したことをきっかけに、2015年に南会津町に移住。農産加工や6次産業化に取り組み始め、

地域おこし協力隊から豆腐店起業へ
茅葺屋根や曲家が軒を連ね、日本の原風景を今に伝える南会津町舘岩地区の「前沢曲家集落」。その中にある資料館で週に一度、案内役を務める江井さん。メインの仕事は豆腐づくりです。南会津の水で仕込み、今では珍しい釜炊きによる、こだわりの豆腐をつくり続けています。
もともとは都内でシステムエンジニアとして勤務していた江井さんですが、「この先何十年も続けていくとなると、違うのかなと思っただけです。そんな中、週末農業に参加したことがきっかけで、すっかり農業に魅せられてしまったといいます。「農業というのは、生活に直結している人間らしい営みだと感じ、そこに惹かれるものがありました。いずれは農業の道に進むのもいいな」と思い始めたんです」。

地域を見てまわる中で、次第に豆腐づくりに興味を持つようになります。
「大豆は生産から加工、販売までできます。使用する水の質によっても品質が変わってくるし、奥深く、面白いなと。農産物加工品としての魅力にどんどん惹かれていきました」。
やがて協力隊の任期満了が迫り、今後の暮らしを考えていたところ、隣の地区の豆腐店が廃業するとの話が耳に入ります。「とても残念だったので、挨拶に何うと、「よかったらこれを使ってくれないか」と豆腐製造機器を譲り受けることになったんです」。

世界一周旅行が移住のきっかけに

江井さんが南会津町へ移住する契機のひとつとなったのが、「夢だった」と話す世界一周旅行でした。なかでも興味を抱いたのが、各国の片田舎の風景。「どの国でも田舎に行けば行くほど、地域の文化や伝統が色濃く残っている場所があった、その地域らしさが垣間見られることが非常に面白かったんですね。日本に戻ったら、地方でやっていきたいなと思うようになりました」。

帰国後、いくつかの移住候補地を回った江井さん。最終的に南会津を選んだのも、前沢集落の茅葺屋根の家など、文化的な視点から魅力を感じたことがきっかけでした。

また、季節によって全く異なる表情を見せる自然環境も、移住決断のポイントになりました。



「ふらっと出かけただけでも息を呑むような景色に出会えたり、とにかく素晴らしい自然環境は、子育てにも最適だなと思いました。私自身、ゆるゆるニュータウン育ちだったので、できるだけ子どもたちに食べさせたいか」ということです。とにかく正直なもののづくりをし

もたちには、小さい頃から大自然に触れ合っほしいと思っています」。
自分の子に食べさせたい、そんな「正直なもののづくり」を
江井さんの当面の目標は、豆腐店をしっかり軌道に乗せていくこと。それには、製品の価値を高めていくことが欠かせません。
「山奥なので、店頭販売だけでは正直厳しいです。自分で積極的に販路拡大をしていかないとけないという大変さがあります」。
しかし、決して不可能なことではないと話してくれました。
「今では蒸気ボイラーを使う製造法が主流ですが、昔からの手法で大事に炊くことで美味しい豆腐ができます。手間はかかりますが、価値あるこだわりの豆腐がつくれると思っています」。
こうしたストーリー性や価値を付加できるのは、原風景の残る、大自然に恵まれた南会津ならではの強み。そして何よりも、江井さんが大切にしている想いがあります。
「一番は、『自分の子どもたちに食べさせたいか』ということですね。とにかく正直なもののづくりをしていきたいです」。

えねいとうふ店こだわりの商品



子どもたちに、「ふるさと」と呼べる場所を

Message!

自然の中で四季を感じられる環境のほうが、
子どもたちが素敵な大人に
成長してくれるんじゃないかな。



福島県大沼都会津美里町在住 岩波 友紀さん・聡子さん夫妻

福岡県出身の岩波聡子さんは、東京、大阪から福島市を経て、会津美里町に一家で移住。自らの手でリフォームを続ける古民家で暮らしながら、人気の自家製天然酵母パン教室「いわなみ家」を主宰している。
長野県出身のご主人・友紀さんと2人の娘さんとの4人家族。



聡子さんが作る天然酵母パン

新聞社勤務からパン教室主宰へ
もともと新聞社に勤務していた聡子さん。ご主人の友紀さんは同僚で、同じ報道カメラマンでした。結婚を機に退職後、パン好きだった聡子さんは都内のパン職人養成校に通い、その道を極めていくことに。
「最初は生業にするとは考えておらず、自宅で食べたり、職場の方に配ったりしていた程度でした。しかし次第に、東京や引越した先の大阪でパン教室を主宰するようになります。その後、かつて福島を取材し「福島を撮り続けた」という友紀さんの転勤の希望が叶い、福島市に住むことに。ここでもパン教室を開催したところ、1か月まるまる予約が埋まるほどの大盛況。『どんな場所でもパン教室のニーズは想像以上にある』と感じたそうです。

子どもたちに「ふるさと」と呼べる場所をつくりたい

それからしばらくして、友紀さんがフォトグラフアールとして独立し、夫婦揃ってフリーランスの道に進むというタイミングで、かねてより夢だった田舎暮らしの実現に向け一家は動き出します。移住に当たり、岩波さん夫妻が最も重視していたことの1つが、子育て環境でした。「長女が小学生になる前に、『子どもたちにとって、故郷になる場所を探したいね』と夫婦で話していたんです」。

その願いを叶えるために、外すことのできない条件がありました。

「季節の移ろいがはっきりしているとそこに住みたかったんです。自然の中で四季を感じられる環境のほうが」

子どもたちが

素敵な大人に

成長してくれ

るんじゃない

かなと思っ

て。大人にな

ったらいっ

でも自分の意

思で都会には

行けるけど、

幼少期に田舎

でしかできな

い体験を体

地域に根付いたパン作りを

染み込ませて、引き出しをいっぱい作ってあげられたらと思ったんです。
そしてもう一つ、重要なポイントがありました。「主人は、できれば自分の生まれ故郷に似ているところに住みたいとの想いがあったようです。山があり、蕎麦が美味しくて、温泉がある場所がいいと常々言っていたんです。その理想に最も近かった場所の一つが、会津美里町でした」。

会津美里町がワインの産地であることも、この町への移住の後押しになりました。自家製の天然酵母からパンを製造している聡子さんは、最高のパンを作るため、周辺環境にもこだわりたいと考えていました。

「パンとワインは切っても切れない関係。近くに良いワイナリーさんがあることは、パン作りを仕事にしていくなに当たり、理想的だなと。それに、町内には会津本郷焼で有名な旧会津本郷町があったり、ものづくりをする人が多い土地なんですよ。だから、商売をする上でも最適な場所だと思っただんです」。

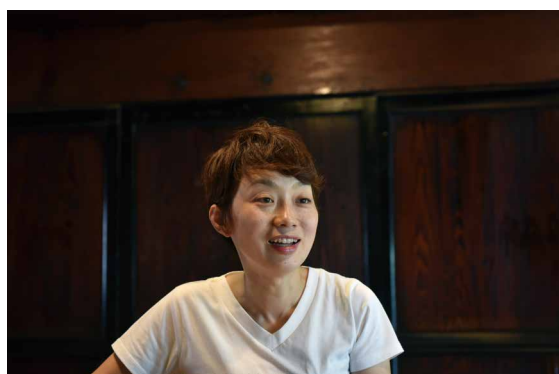
また、現在の住まいとなる古民家との出会いも移住を決意する契機になったそう。風情ある古民家は、古き良き日本家屋の姿を残しながらも、ここらどに現代風のリフォームが施されています。これらは、DIYを大の得意とする友紀さんの手によるもの。風呂場なども自分たちの手で改修しているそうです。「古民家のリフォームは

お金のかかることですが、ありがたいことに福島県の補助金も活用しながら、手を加えています。古民家を拠点にすることは、パン教室の大きな助けにもなっていると聡子さんはいいいます。
「生徒さんの中には『おばあちゃん家に帰ってきたみたい!』と大喜びする方もいて、日常とは少し違った雰囲気を感じていただけているようです。いずれは土間を改修してパン工房にしたり、お客さんを泊められるようにしたいと思っています。今後はより一層、地域に根付いたパン作りをしていきたいですね」。

〈2019年取材〉



夕暮れの田園を走る只見線





誰も経験したことのない 挑戦ができる場所で、みんなと共に

Message!

何かやれば結果がついてくることも分かったので、
いわきの漁業は絶対良くなると思います。



福島県いわき市在住 榎 裕美（さかき ひろみ）さん

1992年、青森県生まれ。
大学在学中、東日本大震災のボランティアを経験。その後いわき市久之浜地区の漁業支援プロジェクトに参画するため、大学院を休学し2017年にいわき市に移住。現在は「合同会社はまから」の一員として、地元産の魚の卸販売や漁業の魅力を伝える教育事業などを行っている。

漁師たちのために何かしたい！と
2度目のいわき暮らし
一旦は通っていた大学があった埼玉県で就職した榎さんですが、退職。いわきの人たちと出会ったことで、もっとこの地域のことを知りたいと、8か月間いわきの温泉旅館に住み込みで働くことに。
埼玉に戻って大学院に進み、漁業とまちづくりについての研究をしていた折、いわき市のNPO法人から久之浜のまちづくり事業に関する相談を持ち掛けられます。現地の漁師のために何かでき

るかもしれないと思った榎さんは、いわきへ舞い戻ります。
「その頃、関東での生活のビジョンが描けなくなっていたんです。だから、今しかない！と思いました」。
2017年にNPO法人の職員となった榎さんは、「とりあえず船に乗ってみる？」と声をかけてくれた若手漁師に背中を押され、自らも漁船に乗り始めます。「漁師のみんなが見ている景色を一緒に見たい」と1年間船に乗り続けた榎さんが得たものは、漁師たちからの信頼。そして、漁師の格好よさを地元の子どもたちに伝えたいという想いでした。

子どもたちに伝えることで、
少しずつ変わってきた漁師たち

いわきの漁業は未だに本格操業ができず、震災前の漁獲量には程遠い状態です。そのため、漁師たちも希望を失いかけており、いわきの漁業を活性化させようという榎さんのプロジェクトにも受け身でした。

しかし、榎さんの説得と、漁業に親しむ子どもたちとの触れ合い、そしてそのことがメディアに取り上げられ世間に認知されることで、みんなが少しずつ前向きになってきたといいます。

可能性を感じた榎さんは、震災からのいわきの漁業の活性化というこじでしかない、誰もやったことのない挑戦を久之浜でやり遂げたいと覚悟を決め、地元の若手漁師らとともに「合同会社はまから」を立ち上げました。捕れた魚を店や個人

いわきの海に訪れた明るい兆し

いわき市久之浜では、2019年7月に海水浴場が、そして9月には魚市場が再開しました。東日本大震災から実に9年ぶりです。そのことを何よりも喜んだ1人が、この久之浜に移住した青森県出身の「りんごちゃん」こと榎裕美さんでした。榎さんは今、「合同会社はまから」で、久之浜に漁師を増やすための活動に力を注いでいます。榎さんが初めていわきを訪れたのは、大学2年生の頃。東日本大震災のボランティアを続ける中で、自然と地域の人たちと仲良くなっていききました。その後、大学の授業の一環で遠洋漁業の元漁師さんに話を聞くうちに、震災後の漁業を取り巻く社会的な課題を知ることになります。そこから、漁業や漁師に対し強い関心を持つようになっていきました。



久之浜の風景



漁業体験の子どもたちを優しく見守る

に卸したり、漁師の魅力を知ってもらう活動などを行っており、今年からはいわき市から教育事業を委託されるようにもなりました。
「こんなことをやりた」という覚悟があれば、地元の人は受け入れてくれます。行動すれば認めてもらえるし、飛び込んじやえば何とかなることも多いです。認めてもらえるように、思いを行動に移し続けるしかないと思っています」。
いつかは故郷の八戸に戻るつもりだったという榎さん。今では「もうここ（いわき）に骨を埋める覚悟です」と笑います。
「若い漁師の数が少ないことは大きな問題ですが、若い自分が関わることでできることがあると思っています。何かやれば結果がついてくることも分かったのです。いわきの漁業は絶対良くなると思います」。
そう話す榎さんの声には、力と確信がこもっていました。



「福島の街を楽しく」 そのために真っ直ぐ進み続ける

Message!

周りにたくさんの仲間たちがいる今、
ここでならやれないことはないし、
何でもすぐに始められる。



福島県福島市在住 敷内 義久（やぶうち よしひさ）さん

1979年、福島市生まれ。
東京の眼鏡専門学校を卒業後、都内の雑貨店などで勤務したのち、プロダクトデザインを学ぶためイギリスへ渡るも、2004年、家業の眼鏡店「OPTICAL YABUUCHI」を継ぐため福島に帰郷。
現在は同店を含むニューヤブウチビルを運営している。



通りに面する店舗は明るく開放的

「ニューヤブウチビル」は、福島市街地にある3階建てのビル。1階には眼鏡店、2階には花屋とレコード屋、3階には食堂とギャラリーと、個性豊かなお店が集まっています。
このビルを中心に、周辺にも新しいお店が集まりはじめ、このエリアは「おもしろい街」として話題が絶えません。その仕掛け人といえるのが、オーナーの敷内義久さんです。
福島を出て、東京の眼鏡専門学校を卒業した敷内さんは、プロダクトデザインを学ぶためにイギリスへ留学する準備を進めていましたが、眼鏡店を継いで欲しいという両親からの説得があり、留学を断念。24歳の時に福島市にUターンすることになりました。

夢だった留学を諦めることに未練はあったそうですが、Uターンを決意させたのは、四代続いできた家業の重み。「自分のルーツを振り返ると、父の前にはじいちゃん、曾じいちゃん、そして初代のじい

ちゃんたちがいて、自分が背負っているものの大ささを感じました。

遊びは真面目に、仕事は楽しく

福島市に戻ってからは、店舗を改装したり、イベントを企画したりと新しいことに取り組んだ敷内さんですが、なかなかモチベーションを保てずに月日が流れていきました。
そんな折、運営に携わっていた音楽イベントの代

製作中のオールウッドの眼鏡

仲間がいる今、この街なら
やれないことはない

表から「敷内くん腐ってるね。『仕事は真面目に、遊びは楽しく』って思っていないか?」遊びは真面目に、仕事は楽しく」するんだぞ。仕事を楽しむためにどうすればいいと思う?」とアドバイスを受けます。
「ハッ」としました。自分は他人に言われたことだけをやっていただけ。福島に帰ってきたことも、帰ってこいと言われたから...と思い込んでいました。暮らしを楽しめるか楽しめないかは自分次第なのに、楽しめない理由を自分じゃない誰かの責任にしていたんです。この気付きは、その後の働き方、暮らし方を変える大きな転機となりました。
好きなことを仕事に取り入れてみようと考えた末、チャレンジしたのはオールウッドの眼鏡作り。完成までは苦労や失敗の連続でしたが、2010年にオリジナルブランド「COYA」(コウヤ 荒野)を発表。デザインから制作まで、全てを自らが手がけました。

現在、敷内さんは周辺の空きテナントの店舗誘致も行っています。収入は発生しませんが、原動力は「福島の街が楽しくなればいい」というまっすぐりへの想いと、「自分自身がただ楽しい」という純粹な想い。福島にUターンして15年、様々な人との出会いや出来事を通して、敷内さんの故郷への思いは一層強くなり続けているそうです。
「若い子たちに、福島には何もなくていいと思う



ふくしまへの移住をお考えの皆さんを、私たちがサポートします。お気軽にご相談ください。

SUPPORTER

02

移住・就職相談員



「ふくしまで働きたい、暮らしたい、挑戦したい！」
そんなお一人お一人を暮らしと仕事の両面からサポートします。

〈写真：左から〉 移住相談員 佐藤・新妻

就職相談員 六馬・兵頭

※問合わせ先は、裏表紙「移住・就職相談窓口」をご覧ください。

SUPPORTER

03

移住推進員



ふくしまへの共感や想いを具体的にカタチにするためのきっかけづくりをお手伝いしています。

〈写真：左〉 横山 萌美【よこやま もえみ】

〈写真：右〉 渡部 允道【わたなべ まさみち】

場所：東京都千代田区平河町 2-6-3
都道府県会館 12 階（福島県東京事務所）
Tel：03-5212-9050

SUPPORTER

01

移住コーディネーター



会津地方

会津地域

榎屋 奈津子【まさや なつこ】

「私の大好きな会津」を皆さんにお伝えできるように頑張ります。

Tel：会津地方振興局 0242-29-5292

南会津地域

舟木 隆【ふなき たかし】

短期間の農業体験もできます！
日本の原風景「南会津」で暮らしませんか！
Tel：南会津地方振興局 0241-62-5207

中通り



県北地域

佐藤 陽子【さとう ようこ】

県北地域のコナな情報をお伝えしながら、移住を考えている方を応援します。

Tel：県北地方振興局 024-521-2657



県中地域

蓬田 守【よもぎた まもる】

移住する側、受け入れる側の双方が満足できるよう、移住後のサポートにも力を入れています。
Tel：県中地方振興局 024-935-1323



県南地域

増成 貴弘【ますなり たかひろ】

地域社会との「関わりしろ」が多く、自分を生かせる場がたくさんありますよ！

Tel：県南地方振興局 0248-23-1546

浜通り



相双地域

松本 克己【まつもと かつみ】

ぜひ現地を訪れ、被災地の復興が進んでいる様子も実感していただきたいと思います。

Tel：相双地方振興局 0244-26-1117



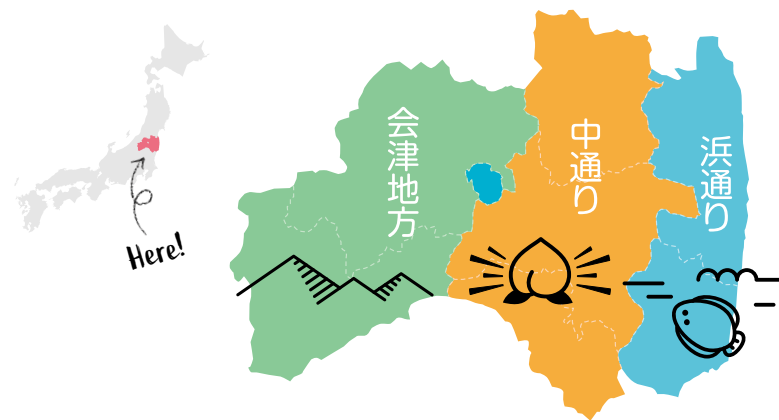
いわき地域

鈴木 美由紀【すずき みゆき】

東京から2時間、安心して子育てできるいわきでの暮らしを一緒に楽しんでみませんか？

Tel：いわき地方振興局 0246-24-6253

福島県は、東北地方の一番南に位置しており、全国で3番目に広い面積を持っています。
気候や風土が異なる3つの地方（会津・中通り・浜通り）に分けられ、それぞれ魅力的な発展をしてきました。



会津

手つかずの雄大な自然／歴史と伝統

全般に起伏の大きな山地が占める地域です。磐梯山や猪苗代湖、尾瀬湿原といった県内を代表する景勝地のほか、歴史情緒を感じられる街並みも残っています。

気候

夏は山間部で涼しく、盆地では蒸し暑くなります。冬はたくさんの雪が降り、気温もかなり低くなります。

中通り

鮮やかな四季／便利な交通アクセス

南から北に阿武隈川が流れ、東西を2つの山地に挟まれ盆地が広がる地域です。米や果樹、野菜の栽培もさかんで、主要交通網が整備されており、都心からのアクセスも便利です。

気候

夏は山間部ではさほど暑くなりませんが、盆地ではかなり蒸し暑くなります。冬は冷たい風が吹き、雪も降ります。

浜通り

太平洋を望む景色／歩み続ける復興の地

約160kmの海岸線に沿った低地帯で、太平洋へ注ぐ河川の渓谷美も魅力です。近年、新たなまちづくりが進み、ロボットなどの新たな産業基盤が整備されつつあるエリアとしても注目されています。

気候

夏は海から涼風が吹き比較的過ごしやすく、冬でも比較的温暖で、降雪日が数えるほどしかありません。

ACCESS

東京からは日帰りできるほど近いです！

- 新幹線・電車
 - 東京～福島（約1時間35分）
 - 東京～郡山（約1時間20分）
 - 東京～新白河（約1時間30分）
 - 東京～郡山～磐越西線＞会津若松（約2時間40分）
 - 東京～常磐線＞いわき（約2時間20分）
- 自動車
 - 東北自動車道・川口JCT～福島西IC（約2時間50分）
 - 川口JCT～郡山IC（約2時間30分）
 - 常磐自動車道・三郷IC～いわき中央IC（約2時間）
 - 三郷IC～南相馬IC（約3時間）

札幌や大阪からは空路で結ばれています！

- 飛行機
 - 新千歳空港（北海道）～福島空港（約1時間20分）
 - 伊丹空港（大阪）～福島空港（約1時間10分）



● 移住・就職相談窓口

福が満開、福しま暮らし情報センター
東京都千代田区有楽町 2-10-1 東京交通会館 8 階
(認定 NPO 法人 ふるさと回帰支援センター内)

移住

Tel : 03-6551-2989
Mail : fukushima@furusatokaiki.net

就職

Tel : 03-3214-9009
Mail : fturn-soudan@pref.fukushima.lg.jp

30 組を超える移住者インタビューや
イベントレポートを掲載中！

● ふくしま移住応援 WEB マガジン
エフステ！ ホームページ

エフステ

検索

